

## 1. はじめに

本論では、「じゃないか」系表現について考察する。「じゃないか」系表現とは、「じゃない(か)」をはじめとして、「じゃない(か)」と音声的に類似した「じゃん(か)」や方言形の「やん(か)」等の表現を指す。日本語を対象とした記述的な文法研究では、「じゃないか」系表現に関する研究が数多くなされている(田野村(1988, 1990); 三宅(1996, 2011); 宮島・仁田(編)(1995); 蓮沼(1995); 宮崎(2000); 凌(2021)など)。一方で、生成文法の枠組みでの研究は手薄である。

- (1) a. もしかして合格じゃない(か)?                      b. だから言ったじゃん(か)。

本論では、分離 CP 仮説に基づき、「じゃないか」系表現の振る舞いを観察する。「じゃん」や関西方言の「やん」は CP 領域に基底生成される一方で、「じゃない」は、CP 領域より下位に基底生成されることを示す。さらに、「じゃん」と「やん」では、丁寧語との共起の可否に関して差異があることを示し、この差異を慣習的推意 (conventional implicature) の観点から説明する。

## 2. 日本語の節周縁部

本節では、日本語の節周縁部の階層構造について論じる。本論では、日本語の CP 領域に対して、多重の投射からなる(2)の階層構造を仮定する (cf. 森山(2022))。

- (2) [CTP [RJP [AddrP [TP ... T] Addr] RJ] CT]

まず、AddrP (Addressee Phrase) は、聞き手の属性や聞き手との関係(上下関係や親疎関係)の指定に関与する投射である(Yamada(2019))。聞き手との関係に応じて使い分けられる丁寧語がこの投射に関係付けられる。丁寧語の統語的分布を整理すると、丁寧語は二種類に分類できる。(3)では、時制要素の左側に丁寧語が現れており、(4)では、時制要素の右側に現れている。前者を丁寧語 A、後者を丁寧語 B と呼ぶことにする。丁寧語 A は、CP 領域より下位に生起し、Addr に主要部移動を起こすのに対して、丁寧語 B は Addr に基底生成されると想定する(森山(to appear))。(なお、AddrP は最も典型的には聞き手に対する丁寧さを表す語(対者敬語)が認可される投射であり、項の指示対象を敬意の対象とする尊敬語・謙譲語(素材敬語)は AddrP とは関係を持たない。)

- (3) a. 太郎は本を読みました。                      b. 昨日は休みでした。                      (丁寧語 A)  
 (4) a. 太郎は優しかったたです。                      b. 昨日は休みではなかつたたです。                      (丁寧語 B)

次に、RJP (Recognition-Judgment Phrase) は、話し手の認識や判断を表す形式が認可される投射である。記憶の確認や回想を表す終助詞の「っけ」が RJP の主要部に起こる。最後に、CTP (Clause Type Phrase) は、節のタイプの指定に関与する投射である。疑問文であることを指定する終助詞の「か」が CTP の主要部に生起する。Rizzi(1997)では、節のタイプの指定に関する投射として ForceP が仮定されているが、語用論における発話の力(illocutionary force)との関係性が必ずしも明確でなく、誤解を招く可能性があるため、ForceP というラベルは採用しない。

- (5) a. 今日は休みだたっけ?                      b. 昔ここで遊んでたっけ。あれからもう 20 年か。  
 (6) 太郎は来ましたか?

これらの文末形式の線形順序を整理すると、(7)から、「です(丁寧語 B)」、「っけ」、「か」の順に並ぶことがわかる。これに基づき、CP 領域に対して、(8)の階層構造を立てる。

- (7) a. 去年は寒かつた {ですっけ/\*っけです}。                      b. 去年は寒かつた {ですか/\*かです}?

c. 去年は寒かった {っけか/\*かっけ}。

(8) [CTP [RJP [AddrP [TP .....T] です Addr] っけ RJ] か CT]

次節では、(8)の階層構造を前提として、「じゃないか」系表現の統語的分布を確認する。

### 3. 「じゃないか」系表現

#### 3.1. 「じゃない(か)」の二つの用法

「じゃない(か)」には、大きく分けて二つの用法が認められる(田野村(1988,1990); 三宅(1996,2011))。(9)aにおいて、「じゃない(か)」は、文が真であることを話し手が確信していない場合に使用される(cf. 田野村(1990)の乙種)。一方で、(9)bの「じゃない(か)」は、自分の発言内容が正しいことを話し手が信じているケースで使用される(cf. 田野村(1990)の甲種)。(日本語の記述的な文法研究では、「じゃない(か)」は確認要求表現として言及される。しかし、(9)bの例は、話し手が聞き手に確認を要求していないケースでも発話可能なため、本論では、確認要求という用語は用いない。)

(9) a. もしかして合格じゃない(か)? (タイプ A)

b. だから言ったじゃない(か)。 (タイプ B)

「じゃない(か)」に類似した表現に目を向けると、片方の用法しか持たないものがあることに気がつく。長崎方言においては、「じゃない」に対応する形式として「じゃなか」がある。「じゃなか」はタイプ A の用法では容認されるが、タイプ B の用法では許容されない。(長崎方言においては、タイプ B の用法で終助詞の「たい」が用いられる。)

(10) a. もしかして合格じゃなか? b. \*やけん言うたじゃなか。

次に、関西方言の「やん(か)」はタイプ B の用法のみを持つ(田野村(1990))。 (「やん(か)」が使用され始めたのは、明治・大正頃とされる(前田(1977:138))。)

(11) a. \*もしかして合格やん? b. だから言うてたやん。

最後に、「じゃん(か)」は、タイプ B の用法が問題なく容認されるのに対して、タイプ A の用法に関しては個人差があるようである。松丸(2001)では、タイプ A の用法が容認されているが、筆者の判断では不適格である。タイプ A の用法に個人差があることを考慮して、本論では、「じゃん」についてはタイプ B の用法のみを扱う。

(12) a. %もしかして合格じゃん? b. だから言ったじゃん。

本節では、「じゃないか」系表現の二つの用法を確認した。3.2 節と 3.3 節では、これらの形式の統語的な振る舞いを観察し、「じゃない」と「じゃなか(長崎方言)」は CP 領域より下位に基底生成されること、そして、「じゃん」と「やん」が RJP の主要部に基底生成されることを示す。

#### 3.2. 「じゃない」と「じゃなか」

本節では、「じゃない」と「じゃなか」について考察し、これらの形式が CP 領域より下位に生起することを示す。タイプ A の「じゃない・じゃなか」は、(13)a の構造を持ち、タイプ B の「じゃない」は、(13)b の構造を持つ。CP 領域より下位に生起する点は共通しているが、前者は DP を補部を取るのに対して、後者は TP を補部を取る。(「ではない(か)」も同じ構造を持つ。)

(13) a. [CTP [RJP [AddrP [TP [DP .....] じゃない/じゃなか] Addr] RJ] CT] (タイプ A)

b. [CTP [RJP [AddrP [TP [TP .....] じゃない] Addr] RJ] CT] (タイプ B)

これらの形式が CP 領域に基底生成されていないことは、Addr に基底生成される丁寧語 B との

共起関係から確認できる。(14)と(15)のように、タイプ A の用法でもタイプ B の用法でも、「じゃない・じゃなか」の右隣に「です」が生起できることが見て取れる。このことは、「じゃない・じゃなか」が AddrP より下位に生起することを示している。

- (14) a. もしかして合格じゃないですか?      b. もしかして合格じゃなかですか?  
 (15)       だから言ったじゃないですか。

さらに、(16)と(17)から分かるように、「じゃない」では、丁寧語 A の「ませ」が表出可能である。丁寧語 A は、CP 領域より下位に基底生成される丁寧語なので、「ませ」の表出が可能であることは、「じゃない」が CP 領域ではなく、それより下位にあることを明確に表している。

- (16)      もしかして合格じゃありませんか?      (タイプ A)  
 (17)       だから言ったじゃありませんか。      (タイプ B)

タイプ A の「じゃない」とタイプ B の「じゃない」は補部選択が異なる。田野村 (1988, 1990) が記述しているように、タイプ A の「じゃない」は体言に付き、用言には付かない。他方、タイプ B の「じゃない」は体言と用言の両方に付く。

- (18)      a. もしかして正解じゃない?      b. \*もしかして正解だったじゃない?  
 (19)      a. やっぱり正解じゃない!      b. やっぱり正解だったじゃない!

この事実から、タイプ A の「じゃない」は DP のみを選択する一方で、タイプ B の「じゃない」は DP または TP を補部にとると考えられないこともない。しかし、本論では、タイプ B の「じゃない」は、(20)に示されるように、体言に接続する場合にも TP を補部を選択すると想定する。

- (20)      やっぱり<sub>[TP 正解だ]</sub> じゃない!

この想定背後には、奥津 (1978) の「だ」の削除分析がある。奥津 (1978) は、用言に接続できる「かもしれない」や「だろう」などの表現が「だ」には付けないことを観察している。(21)のように、コンピュータの「である」や「だ」に過去時制が付いた「だった」に対しては、「かもしれない」が後続することができるが、「だ」ではこれが許容されない。奥津 (1978) は、「太郎が犯人かもしれない」のように、体言に接続するケースでは、「だ」が義務的に削除されるとしている。

- (21)      a. <sub>[TP 太郎が犯人 {\*だ／である／だった}]</sub> かもしれない。  
             b. <sub>[TP 太郎が犯人だ]</sub> かもしれない。

同じように、体言に付くタイプ B の「じゃない」においても、(20)で示したように、「だ」の義務的な削除が起こると想定する。このように考えると、タイプ B の「じゃない」は、体言に接続するケースにおいても、統語的には TP を選択すると言うことができる。

### 3.3. 「じゃん」と「やん」

本節では、「じゃん」と関西方言の「やん」が RJP の主要部に基底生成されることを論じる。(「今日は休み {じゃん／やん}」のように、「じゃん・やん」が体言に付く場合、「だ」の削除が起きると想定する。)

- (22)      <sub>[CTP <sub>[RJP <sub>[AddrP <sub>[TP ……]] Addr]</sub> じゃん／やん<sub>RJ</sub> CT]</sub></sub></sub>

まず、「じゃん」と「やん」が RJ に起こることは、終助詞の「の」に関するデータから裏付けられる。(23)a は、終助詞の「の」の例である。終助詞の「の」は、(23)b のように、丁寧語 B の「です」との共起が可能であり、「ですの」の語順で生起する。次に、(23)c は、RJP の主要部に現れる「っけ」とは終助詞の「の」が共起できないことを示している。最後に、(23)d から、「の」が CTP

の主要部と共起可能であることが分かる。(23)の共起関係に関するデータから、終助詞の「の」は、(24)のように、RJPの主要部に生起すると仮定できる。

- (23) a. 太郎は帰ったの。 b. 本当に美味しいですよ。  
 c. \*太郎は帰ったつけの。 d. 太郎は帰ったのか。  
 (24) [CTP [RJP [AddrP [TP ……]] です Addr] の RJ] か CT]

「じゃん」と「やん」が RJ の主要部であれば、これらの形式は終助詞の「の」と共起できないことが期待される。実際、(25)に示されるように、「の」との共起は禁止されている。(「じゃん」については、松丸 (2001) にも同様の観察がある。)

- (25) a. \*だから言ってたじゃんの。 b. \*だから言うてたやんの。

一方で、「じゃない・じゃなか」は、終助詞の「の」(長崎方言では「と」)と共起可能である。これは、これらの形式が CP 領域より下位に生起する形式であることによる(cf. 田野村 (1990: 161))。

- (26) a. もしかして合格じゃないの? b. もしかして合格じゃなかと?  
 (27) だから言ってたじゃないの。

次に、「やん」が RJ の主要部に起こるとする分析は、Addr に基底生成される丁寧語 B の「です」が「やん」の右側に生起できないことを予測する。実際、(28)のように、非文となる。3.2 節で示したように、「じゃない(か)」では、「じゃないですか」のように、丁寧語 B の「です」が「じゃない」の右側に生起できる。(28)は、「やん」が CP 領域より下位に生起していないことを表している。さらに、(29)a のように、丁寧語 B の「です」が「やん」の左側に生起できることから「じゃん」の RJ 主要部仮説が支持される。(29)b のように、丁寧語 A との共起も可能である。

- (28) \*だから言うてたやんですか。  
 (29) a. (?)おもしろかったですやんか。 b. だから言うてましたやんか。

このように、「じゃん」と「やん」の RJ 主要部分析は、上記の事実を正しく予測する。ただし、「じゃん」と「やん」では、丁寧語と共起可能かどうかに関して違いが見られる。(30)が示しているように、「じゃん」は丁寧語 A や丁寧語 B との共起が不可能である。(22)の分析は、「じゃん」の丁寧語との共起が可能となることを予測するが、実際には「じゃん」は丁寧語と共起できない。次節では、丁寧語との共起関係について、慣習的推意の観点から考察を加える。

- (30) a. \*面白かったですじゃんか。 b. \*だから言ってましたじゃんか。

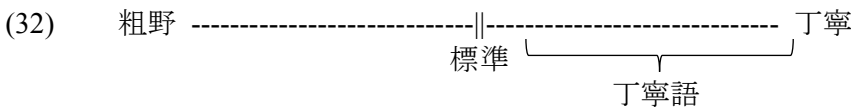
#### 4. 慣習的推意に基づく考察

本節では、「じゃん」が丁寧語と共起できないという事実は、丁寧語と「じゃん」がそれぞれ持つ慣習的推意のミスマッチに起因すると論じる。慣習的推意 (conventional implicature) は、文の真偽判定に関与しない、特定の語に慣習的に結びついた推意である (Grice (1975))。Potts (2005)、Potts and Kawahara (2004)、Sawada (2013, 2014, 2018) は、Potts (2005) の多次元的意味論 (multidimensional semantics) を仮定し、CI に基づく丁寧語の分析を提案している。(31)は、Sawada (2013) が提示している丁寧語「です」の CI であり、話し手 *sp* が命題 *p* を丁寧で発話することが規定されている。

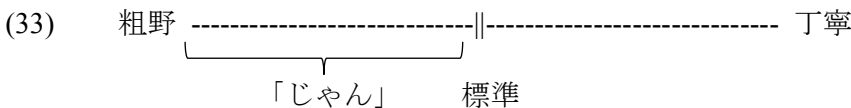
- (31)  $\llbracket \text{desu} \rrbracket = \lambda p. sp \text{ utters } p \text{ in a polite way}$

本論では、文体に関わる(32)の尺度を仮定する。「粗野」な文体とは、「あいつが本を読んでやがる」のように、「あいつ」や「やがる」のように、粗野な表現が含まれる文における文体である。「丁寧」とは、典型的には、丁寧語が含まれる文の文体である。「標準」とは、「粗野」と「丁寧」の中間に位置付けられるような文体である。「標準」から左に離れるほど粗野度の高い文体となり、

「標準」から右に離れるほど丁寧度の高い文体となる。さらに、本論では、丁寧語は、文体を「標準」よりも右側の領域に強制する CI を持つと想定する。



「じゃん (か)」は、静岡県から横浜に伝わり、戦後に東京に進出し、その後、全国に拡大したとされる(井上 (1998))。このため、「じゃん (か)」の使用には世代差があり、全国的には、比較的若い世代間での使用が一般的である。「じゃん」は砕けた文体で使用される傾向があると考えられる。本論では、「じゃん」は、文体を「標準」よりも左側の領域に強制する CI を持つと仮定する。



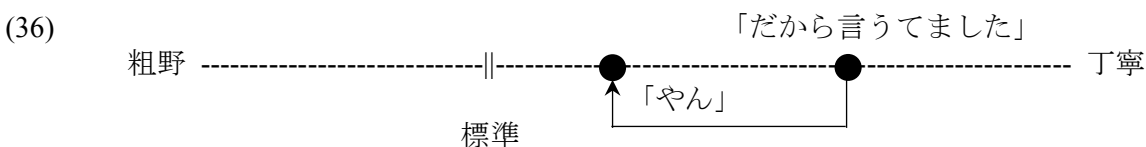
(34)のように、丁寧語と「じゃん」の共起が不可能なのは、文体を「標準」より左側の領域に強制する語と「標準」より右側の領域に強制する語が同時に現れているからである。

(34) \*だから言いましたじゃん。

一方で、関西方言の「やん (か)」は、「じゃん」とは異なる CI を持つと考えられる。手がかりとなるのは、丁寧語との共起が許される状況である。(35)に再掲する例は、どのような状況でも発話可能というわけではない。(35)が容認されるのは、目上の人物から目下の人物に発話されるような状況においてである。反対に、目下の人物から目上の人物に対して発話されるのは、通常、憚られる。

(35) だから言うてましたやんか。(目上 --> 目下 / ??目下 --> 目上)

(35)のような文が目上の人物から目下の人物に対して発話される時、目上の人物は、目下の人物との心理的な距離感を縮める意図を持って発話していると考えられる。一方で、目下の人物から発話されにくいのは、丁寧さを低めた発話をするのが憚られるためであろう。親しい間柄であれば目下の人物からでも(35)は発話可能であると容認する話者もいるが、それは、親しい間柄であれば多少丁寧度を低めた発話をして問題にならないと判断しているからであろう。(この点は、「太郎は優しいっすよ」のように、丁寧度の低い「っす」が親しい先輩に対して使用されることと類似している。) (36)に図示するように、「やん」は文体の尺度が与えられたときに、丁寧度を低める CI を持つ。



ただし、全世代の関西方言話者が(35)のような文を発話するわけではなく、関西方言の中でも世代差や地域差がある。特に、若い世代の話者間で、(35)のような文が実際に発話されることはそれほど多くない。これは、若い世代の話者にとっての「やん」が「じゃん」の CI と同じ CI を持っているということを示唆している。慣習的推意は、特定の語に「慣習的に」結びついた推意なので、語の使用に関する慣習が世代ごとに変化する可能性が常にあり、「やん」の CI に世代差が生じることは十分に期待できる。

最後に、タイプ B の「じゃない」については、丁寧語との共起が可能となるのは、文体の指定が

「じゃない」にないからであると考えられる。

(37) だから言ったじゃないですか。

## 5. まとめと課題

本論では、「じゃないか」系表現の文法特性について、「じゃない・じゃなか」は CP 領域より下位に基底生成されるのに対して、「じゃん・やん」は RJP に基底生成されることをいくつかの経験的事実をもとに示した。「じゃん」と「やん」には、丁寧語との共起の可否に関する違いがあることを観察し、CI の視点からその性質を捉えることを試みた。

最後に、本論で扱うことのできなかった課題に触れる。本分析が正しければ、「だから言ったじゃない」と「だから言ったじゃん」における「じゃない」と「じゃん」は共起可能となることが予測される。ところが、(38)a に示すように、共起不可能である。このため、今後の研究では共起制限のメカニズムを説明する必要がある。また、(38)b のように、「じゃない」や「じゃん」は「か」節に生起できない。(38)の説明については、将来の研究課題とする。

- (38) a. \*だから言ったじゃないじゃん。  
b. \*太郎はだから言った {じゃない/じゃん} か覚えている。

**注記** 本発表の内容は、博士論文第 3 章 3 節の内容を修正・拡張したものである。

## 参考文献

- Grice, H Paul. 1975. Logic and conversation. In Peter Cole and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 43–58. New York: Academic Press.
- 蓮沼昭子. 1995. 「対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法—」仁田義雄 (編) 『複文の研究 下』, 389–419. 東京: くろしお出版.
- 井上史雄. 1998. 『日本語ウォッチング』東京: 岩波書店.
- 前田勇. 1977. 『大阪弁』東京: 朝日新聞社.
- 松丸真大. 2001. 「東京方言のジャンについて」『阪大社会言語学研究ノート』3: 33–48.
- 三宅知宏. 1996. 「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89: 111–122.
- 三宅知宏. 2011. 『日本語研究のインターフェース』東京: くろしお出版.
- 宮崎和人. 2000. 「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106: 7–16.
- 宮島達夫・仁田義雄 (編). 1995. 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』東京: くろしお出版.
- 森山倭成. 2022. 『節の右方周縁部における線形順序と階層関係』博士論文, 神戸大学.
- 森山倭成. To appear. 「日本語の分裂文の統語特性」*KLS Selected Papers* 4.
- 奥津敬一郎. 1978. 『「ボクハ ウナギダ」の文法—ダとノー』東京: くろしお出版.
- Potts, Christopher. 2005. *The Logic of Conventional Implicature*. Oxford: Oxford University Press.
- Potts, Christopher, and Shigeto Kawahara. 2004. Japanese honorifics as emotive definite descriptions. *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory* 14, 235–254.
- Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, 281–337. Dordrecht: Kluwer.
- 凌飛. 2021. 『現代日本語の文末形式「(の)ではないか」』東京: 専修大学出版局.
- Sawada, Osamu. 2013. The meanings of diminutive shifts in Japanese. In Stefan Keine and Shayne Sloggett (eds.) *Proceedings of the 42nd Meeting of the North East Linguistic Society*, 505–518. Amherst, MA: GLSA Publications.
- Sawada, Osamu. 2014. On the context-dependent pragmatic strategies of Japanese self-diminutive shift. In Urtzi Etxeberria, Anamaria Fălăuş, Aritz Irurtzun, and Bryan Leferman (eds.) *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 18, 377–395.
- Sawada, Osamu. 2018. *Pragmatic Aspects of Scalar Modifiers: The Semantics-Pragmatics Interface*. Oxford: Oxford University Press.
- 田野村忠温. 1988. 「否定疑問文小考」『国語学』152: 109–123.
- 田野村忠温. 1990. 『現代日本語の文法 I—「のだ」の意味と用法—』大阪: 和泉選書.
- Yamada, Akitaka. 2019. The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers. Doctoral dissertation. Georgetown University.